暁 鐘 の 音　NO.34

（かねのね）　秋田大学教職大学院 2025.4.7

はじめに

第 34 号では、「教職大学院での思い出」をはじめ、「フォーラムの反省」「卒業後の成長」「次年度の抱負」といったテーマについての原稿を頂戴しました。どうかお楽しみください。

10 年という節目に

教職実践専攻（教職大学院）
前専攻長　田仲　誠祐

光陰矢のごとし－ 本教職院大学院設置前年の2015年、本学教員として着任したと思っていたら、あっという間に定年。充実した毎日で、本大学院の出産から幼児期、児童期を経て青年期まで、 一教員として関わることができた幸運に心より感謝しております。

設置前年の私は手探り状態で、省察・実習の進め方、県・市教育委員会及び附属学校園等との連携推進を中心に準備に関わりました。設置1年目は、様々な問い合わせや各方面との連携調整で綱渡りの日々だったことが思い出されます。クォーターセンチュリーの今年 2025 年、教職大学院は着実に歩みを進め 10 年という節目を迎えます。

節（node） とは、植物における茎や枝の部分で、葉や芽、花などが形成される場所のことを指します。節の主な役割としては、成長点（分裂組織が存在）、支持構造（節は植物の茎や枝を強化する役割）、分岐のポイント（形や全体の構造要因）を挙げることができます。節目の役割は、人の成長、組織の成長にも同様に当てはめることができ、以下の４点で重要です。

振り返り： 振り返り、自分が達成したことや学んだことを見つめ直す機会となる。

目標設定：次のステップにおける、目標やビジョンを設定する機会となる。

リセット： 挫折や後悔をリセットし、心機一転して物事に取り組む契機となる。

自己成長の視点： 現在の自分と将来の自分をつなげ、長期的な視点で人生・組織を捉える。

節目を大切にすることによってこそ、人も組織もより高く、より大きく成長発達することができます。設立 10 年という節目はとても重要であり、教職大学院に在籍する皆様には大いに期待しています。この節目に、「あの丘を越えよ」の意味を互いに問い、語り合い、さらなる飛躍への歩みを始める年にしましょう。私たち「惟蕗の会」ネットワークも全面的にバックアップします。

子どもたちへの感謝を込めて

教職実践専攻（教職大学院）
前カリキュラム・授業開発コース長　　長瀬　達也

秋田本学教育文化学部に来るまで、秋田県の公立中学校に 14 年間務め、その後前任の秋田大学教育文化学部附属小学校に３年間務めました。附属小学校に来るまで小学生に直接かかわったことがなく、実に学びの多い日々でした。中学生を 14 年間ずっと相手にしてきた私は、初日の新任式で好奇心や歓迎の気持ちを元気に、そして素直に心身で表現し、歓迎してくれる子どもたちに、とても戸惑いをもったものです。

実際に、3 年生から 6 年生までの図画工作科専科教員として授業で出会ったとき、子どもたちの高いキーの声、自分には予想がつかない行動や言動の続出などで、パニックになりそうでした。高学年の図画工作科は、中学校の思春期にある生徒の心情などとのつながりが感じられるので、なんとか対応できました。しかし、小学校３年生あたりになると、これまでの経験がまったく役に立ちませんでした。まるで、腫れものをさわるように授業の日々でした。

こんな私の危なっかしい授業でも、子どもたちは、図画工作科を心から楽しみにして図工室へやって来て、期待感を込めた熱い視線を私に集中させてくるのです。子どもたちから図画工作科への熱い期待と意欲をぶつけられた私は、「本気で美術教育を勉強し直そう」とあらためて思いました。ハーバート・リード『芸術による教育』やエリオット・アイスナー『美術教育と子どもの知的発達』などの美術教育はもちろん、ペスタロッチ『シュタンツ便り』やデューイ『学校と社会』などにアンダーラインを何度も引いて読み直したのはこの頃です。

そんな私が、自分が担任する学級の子どもたちと、ちゃんと授業ができるのかを心配して、３年生担任の先生(現附属小学校副校長の京野真樹先生です)は、空き時間なのに、いつも図画工作科の授業を見に来てくれました。さらに、子どもたちから授業時の話を聞いて、私のねらいが伝わっているかどうかを確かめてくれました。その応援が大変心強く感じられたものです。

３年生の授業で印象に残っているのは、子どもたちに「くぎうめいろをつくろう」という題材に関心をもってもらうため、180 ㎝×90 ㎝のベニヤで巨大なコリントゲームのようなゲーム盤をつくったことです。完成は深夜になりましたが（当時の附属小学校ではよくあることでした‥）、翌日子どもたちがこの台に群がって離れないのを見て、大いに苦労が報われました。

当時は幼さを残していた３年生も、今では立派な社会人です。私はこの学年にたいへん縁があり、４年生では学級担任、５年生では学年所属で図工専科でした。6年生になって私が本学に来た際は、附属小学校 6 年部の御理解と御協力で、６年になった彼らの図画工作科の授業を学級担任とティーム･ティーチングという形で担当させていただく機会がたくさんありました。

本学部附属小学校での在任は 3 年でしたが、小学生の図画工作科の授業に、たっぷりと浸ることができました。小学生の劇的な造形表現の発達過程や、子ども一人一人の個性から生まれる表現の多様性を実感できて、深く分析し、考察することができたのです。大学における美術表現の多様性を活かす研究や、小学校教員免許取得の図画工作科指導法などの授業における基盤や柱になったことは、間違いがありません。

定年の今、当時の附属小学校の子どもたちに、感謝の言葉を送りたいと思います。

学び続けることの大切さ

教職実践専攻（教職大学院）
前客員教授　　今田　智範

秋田大学で４年間お世話になりました。私の仕事は、学部生の教員採用試験対策のゼミが中心でしたが、教職大学院生の皆さんともインターンシップやリフレクションなどで深くかかわることができ、とても楽しい４年間でした。

さて、この４年間で強く感じたことは、学び続けることの大切さでした。大学院の先生方の授業を見させていただき、また自分の担当する教職関係の授業の準備を通して、新たな知識や考え方、ものの見方に触れ、とても勉強になりました。公立小中学校の教職員時代にこの経験ができたら、私ももう少ししっかりとした授業や生徒指導、学校経営ができたかもしれないと自分の勉強不足を反省しています。現職院生の皆さんも多忙な一年間だったと思いますが、タイムリーな時機にタイムリーな内容の学びができたことと思います。ストマスの院生の皆さんも、学校現場に出る前に貴重な学びが恵まれた環境の中でできたのではないでしょうか。

社会の急激な変化は、学校教育に大きな影響を及ぼしています。学習指導要領の改訂では、「予測できない変化を前向きに受け止め、主体的に向き合い・関わり合い、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となるための力を子どもたちに育む学校教育の実現を目指す。」としています。この実現のためには、当然教師も学び続けなければいけません。私も学校教育と関わる仕事をもう少し続ける予定ですので、今後も自ら学び続ける情熱と意欲をもち続けたいと思います。

大変お世話になりました。またどこかでお会いできることを楽しみにしています。

「教職大学院での学びを学校へ」

２０２３年度　学校マネジメントコース在籍
秋田県立ゆり支援学校　神田雄樹

教職大学院を卒業して、早くも１年が過ぎようとしています。振り返ると、昨年度は慣れない環境の中で「研究成果を出さなければ」というプレッシャーを感じながら過ごした１年でした。一方で、学校現場から離れたところから、教育を客観的に見つめ直す機会を得ることができたことは、これまでにはない貴重な機会となりました。

今年度は、中学部３年生の担任を務めるとともに、図書情報部のＩＣＴ推進リーダーという役割を担っています。昨年度の研究成果を職員に還元できる分掌部に配置していただけたことに、やりがいを感じながら２年目の研究を継続できました。

年度当初はスピード感の違いについていくので精一杯で、たった１年間とはいえ学校現場を離れていたブランクを感じながら過ごしました。学校業務をこなしながら研究を進めるのはハードでしたが、タブレット端末活用に関する研修を行った後で、「小学部の子どもで入力が難しいんだけど、どうしたらいいかな？」や「こんなの作ってみたけど、どうかな？」という前向きな先生方の姿勢や熱意に背中を押していただけたと感じています。さらに、アンケートやインタビューなどをお願いした際にも快く引き受けてくださる先生方のおかげで、実践的な研究を進めることができました。

２月には秋田教育研究発表会において、２年間の研究の成果を発表することができました。その際に、現職院生やストマス、お世話になった先生方と再会することができ、教職大学院で得たつながりを改めて実感しました。

これからも、教育現場において学び続ける姿勢を忘れず、実践と研究の両面から成長を続けていきたいと思います。そして、教職大学院のさらなる発展を心から願っております。

田仲先生との思い出

２０２３年度　学校マネジメントコース在籍
にかほ市立金浦小学校　三浦雄司

「田仲先生」というお名前を初めて耳にしたのは、今から３０年以上も前のことだ。私が初任者だったころ、「本荘北中学校に数学の授業名人・田仲先生がいる」という噂が、新任の教員たちの間で広まっていたのが最初だった。その後の約３０年間、珍しい「田仲」という苗字のためか、「あっ、附属に行かれたんだ。」「ええっ、中仙中学校の校長になられるの？」「大学の教授になられたんだ！」と先生の異動先を自然と追いかけるようになっていた。数学のエリートというイメージから、私は勝手に田仲先生のことを「厳しくて怖い先生なのだろう」と想像していた。そして、教育理系の道を志していた娘に対し、「せっかくだったら秋田大学に進学して、田仲先生から学べたらいいのになあ」と思ったこともあった。

そんな私は令和５年４月に初めて田仲先生とお会いすることになる。そして、不思議なご縁で、社会科専攻の私がなぜか田仲ゼミに所属させていただくこととなった。まるで運命に導かれたような気がした。実際にお会いした田仲先生は、私の想像とは少し異なっていた。厳格な雰囲気というよりも、温かく、何でも包み込んでくれるような先生だった。しかし、ゼミの時間になると、その鋭い視点、勉強熱心な姿勢、そして卓越した指導力に圧倒された。他の現職の先生方から「えっ、そんな時間までゼミをやっているの？」と驚かれることも多々あったが、思い返せば、私が先生のそばでゆっくり学びたいと願っていたのかもしれない。

１年間の学びを経て、私は所属校に戻り、現在は教頭を務めている。奇遇にも、校長も田仲ゼミの出身であり、しばしば先生との思い出話に花が咲く。現場は想像以上に厳しく、心がすり減るような日々であるが、田仲先生の教えやゼミでの経験を支えに、何とか乗り越えている。ただただ感謝である。

田仲先生は、ご退官後もきっと飽くなき挑戦を続けられることだろう。もし何か面白いことが見つかったのであれば、また私を導いていただけることを心より願っている。

『学び続ける』ということ

学校マネジメントコース
現職院生修了生　加藤　俊和

2月も今日で終わり、明日からは3月。来週は歓送会と、いよいよ教職大学院での生活も残りわずかとなりました。先週末までの大雪が嘘のような春らしい陽気の中、院生室でこの一年のことを振り返りながら執筆しています。2月14日～15日に行われた教職大学院の一大イベントである「あきたの教師力高度化フォーラム」での実践研究発表も無事終了し、現職院生はほっと一息つくとともに、4月からの現場復帰に向け、期待と一抹の不安を抱えている今日この頃です。

さて、私は学校マネジメントコースで、学校のリーダーとしての素養や知識を様々な講義や実習、見学や体験などを通して学びました。それは現場にいては経験できない貴重な学びとなりました。また、他校種の現職院生との協議や日常的な会話を通して、他校種の現状を知り、見識を広げることができました。ストレートマスター（通称ストマス）との関わりも、現場ではなかなかできない、今の若い人たちの感性を知る良い機会となりました。そして、実践研究を通して所属校と一年間関わる中で、改めて学校現場の良さを強く実感しました。

今年度は教職三十年の節目でした。そのようなタイミングで再び大学で学ぶ機会を得て、最初は（年齢的に）やっていけるかという不安が大きかったのですが、毎日を過ごす中で、それが日常となり、目標も見えてきました。教職大学院での学びを通して、私は「学び続ける教師」としての意識を強く持つようになりました。教育を取り巻く環境は常に変化しており、教師自身も常に学び続けることが求められます。現場に戻った際には教職大学院で培った経験を生かしていくとともに、経験や知識を常にアップデートできるよう、今後も学び続けていきたいと考えています。

最後になりましたが、専攻長の田中先生、コース長の佐藤先生、指導担当の藤井先生をはじめ、大学院の先生方には、心より感謝申し上げます。先生方の温かいご指導と励ましがあったからこそ、この一年を充実した学びの時間とすることができました。8月の「あきた惟蕗の会」で、先生方、そして共に学んだ仲間たちと再会できることを、心から楽しみにしています。

院生生活を振り返って

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生修了生　加藤　毬乃

2年間に渡る院生生活は長いようであっという間でした。ついこの間入学式だったかと思えばあれよあれよといううちに1年次も2年次も終わってしまい、ついには卒業式。光陰矢の如しとはまさにこのことだと実感しました。

そんな生活ではあったものの、得られたものはここに書ききれないくらいたくさんありました。院生の皆さんや先生方とのご縁、学内外での授業・実習・研究、さらには誕生日パーティー・バーベキュー・食事会といった楽しい催しなど、いずれも大学院に進学していなければ経験できなかったものばかりです。特に3つ目の催しに関しては、入学当初に大学院および院生に対して抱いていた堅苦しいイメージを良い意味で崩すものでした。

改めて振り返ると、これらの多種多様な経験に加えて私自身の多少の成長もあってか、学部時代から漠然と抱いていた「この先教職でやっていけるのだろうか」「まだまだ未熟者なのに教壇に立って良いものか」といった悩みや不安が和らぎ、少しだけ自信がついたように感じます。卒業まで

に解消しきれなかったのが心残りですが、自分の能力を過信しないという意味ではこのくらいがちょうど良いのかもしれません。

4月からは地元である秋田を離れて茨城の中学校で働くことになりますが、ここに記したことを忘れず、そして何よりも周囲の方々から念入りに伝えられたように健康第一という姿勢を忘れずに励みたいと思います。

第16回あきたの教師力高度化フォーラムを終えて

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生２年次　　佐藤　理晶

第 16 回あきたの教師力高度化フォーラムの 1 日目では、学部卒院生 2 年次がプレゼンテーション形式で研究成果を発表し、学部卒院生 1 年次と発達教育・特別支援教育コースの現職院生がポスター発表による研究中間発表を行った。どの発表も、学校運営や授業設計に関する課題を踏まえ、先行研究に新たな知見が加えられており、大変興味深いものであった。また、今後の教育実践に活かせる価値のある内容が多く、さまざまな発表を聴くことで私自身の視野も広がった。

私は「教科書の問題を活用した数学的モデル化の授業実践」というテーマで発表を行った。6 月から 10 月にかけて附属中学校で実習を行い、その授業実践をまとめたものだ。実習校の指導教員の先生から多くの助言やご協力をいただきながら、研究を進めることができた。振り返ってみると、授業力がまだまだ未熟な状態で研究を並行して進めることは大変であった。しかし、実践を通じて得た成果と課題をもとに、一度理論に立ち戻って改善点を見出し、次の実践につなげることは、より質の高い教育方法を追究する教師にとって重要なプロセスだ。その意味で、今回の研究は私にとって非常に有意義な経験となった。

また、ポスター作成にあたっては、主担当教員の助言を受けながら試行錯誤を重ねることで、研究の進め方や内容構成について理解を深めることができた。さらに、質疑応答では他校種の現職院生やストマス、外部から参加の皆さんと意見を交わし、自分の研究をより深く考える貴重な機会となった。このように、研究中間発表は 1 年間の学びを振り返り、自身の成長を実感する機会になったと感じている。

来年度は今回の経験と学びを活かし、今年度明らかになった課題をもとに、より本格的に研究を進めていきたいと考えている。1 年間ご指導・ご協力いただいた大学の先生、実習校の先生に心より感謝申し上げます。

結びに

この度は、暁鐘の音 34 号をご覧いただき、ありがとうございます。今回の 34 号では、教育に関するテーマはもちろんのこと、年度の終わりであり、かつ別れの季節である「春」という季節に関して、これまでの振り返りや思い出、教職大学院での成長、次年度の抱負に焦点を当てて原稿を依頼させていただきました。現職院生や学部卒院生の方々だけではなく、退官される先生方や前年度卒業された先生方にもご協力いただき、年度の集大成といえる素晴らしい『暁鐘の音』を作り上げることが出来ました。寄稿にご協力いただいた皆様に心から感謝いたします。2025 年、新たな年度の始まりを皆様が晴れやかに踏み出していくことができるように祈っております。

暁鐘の音 34 号編集担当　田口　陽介